



考える葦

加藤登紀子

一九七二年、結婚した年、生まれてはじめて二冊の本を出した。

『壊された大地の上に』（合同出版）と『ろばと砂漠と死者たちの国』（文化出版局）。ちょうど三十年たって夫が死去したことで、去年改めて夫のことを『青い月のバラード』（小学館）というタイトルで書くことになり、久しぶりにこの二冊のオリジナル本を書庫から出して来た。

今の本にくらべると、紙が少しコリッとしていてザラついている。何となくそれが重厚な存在感となっていて、感慨ひとしてお。

『ろばと砂漠と死者たちの国』の本づくりには、イラストレーターの和田誠さんがこんな提案をした。
カラー写真を、あえてツルとしたグ

ラビア紙にせず、マットな紙に印刷して新しさを出そうよ。

この作戦は、近ごろの新しさにも充分通じるなあと、改めて感じた。

つい最近、私の知人が、麻でつくった紙の冊子を送ってくれたのだ。

「これがなかなかいい。ザラッとしていて何となく空気をはらんでいるようなやさしさがある。日本では、麻の繊維からつくった紙が、そもそものはじまりだったと聞く。」

戦後は、麻の栽培が厳しく禁止されるようになり、絶滅といってもよい程になつてしまつたけれど、日本の文化には、もともと麻は欠かせないものだったろう。そういうば、「わら半紙」というのは、稲わらの繊維を使った紙なんだそうで、木材パルプより安価だったといつことらしいけれど、今は木材パルプでつくられた立派なシャリツとした紙が結構安く、私たちは惜しげもなく使つてしまつてい

る。紙が貴重なものだった平安時代の文学が珠玉であったことを想つと、紙の価格はもっと高くてもいいのかもしれないとも思う。



加藤登紀子(かとう・ときこ) 1943年ハルビン生まれ。東京大学在学中に歌手デビュー。最新アルバムは『沖縄情歌』。2000年にUNEP(国連環境計画)親善大使に就任した。昨年、自叙伝『青い月のバラード』(小学館)を著したほか、フランス絵本『大きな空の木』(フレーベル館)では翻訳も手がけた。

「このころは再生紙の利用もすすみ、国によっては、百パーセント再生化を成功させている国もあるというし、木材にたよらずあらゆる繊維から紙をつくる時代になつたとも聞く。」

トウモロコシ、さとうきび、バナナ、パイナップルそして注目の麻だ。日本の気候は麻の栽培に適しており、農業も化学肥料も使わず、一年ごとに百日程で収穫出来る。

おまけに、麻の実はタンパク源となり、茎からはバイオプラスチックを作ることが出来るという、願ってもない新しい可能性だ。こんな話を知つてしまつと、麻の紙の時代が早く来てくれなかなあ、と夢みてしまつ。

二十一世紀、人はもう一度「考える葦」に戻らなくてはいけないよつですね。ちなみに葦はパピルス、エジプトで人がはじめて紙をつくつた材料だ。

PAPER COLUMN Vol.12

古紙利用のメリット

古紙の回収へのご理解も進み、皆様のおかげで日本の紙の原料の約6割を古紙が占めるようになっていきます。最近では、古紙100%の再生紙も登場しています。古紙の再利用のメリットには、次の3つがあります。

役目を終えた紙を新たに生まれ変わらせる、という資源の有効利用です。古紙はきちんと分別すれば再利用できます。実際、古紙は「街の資源」と表現されることもあります。次に、ゴミの減量化です。古紙回収が進みますと、ゴミの量が減り、

ゴミ処理の費用も少なくて済みます。そして、エネルギーの節約です。古紙の再生のぼうが新たにつくるものよりエネルギーはかかりません。

今後とも古紙の利用をさらに高めるためのご協力をお願いいたします。



古紙は大切な資源です



今回は4月29日号、ピーター・フランクルさんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Yohei Maruyama